

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 6 年 5 月 22 日現在

機関番号：14101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K19958

研究課題名（和文）合理的なフィクションとしての道徳と道徳的介入の限界

研究課題名（英文）Morality as rational fiction and the limits of moralistic intervention

研究代表者

野上 志学（Nogami, Shigaku）

三重大学・人文学部・講師

研究者番号：40963393

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、メタ倫理学における錯誤説や道徳懐疑論を前提として、合理的なフィクションとしての道徳の可能性を探究するものである。とりわけ、フィクションとして道徳を導入する際に、革命的表出主義と呼ばれる見解に依拠する可能性の是非について検討した。これは、我々は道徳語の使用を、メタ倫理的表出主義に沿うかたちで変更することを主張するものである。表出主義にはさまざまな利点があるとはいえ、Frege=Geach問題というきわめて深刻な論理的問題が指摘されてきたが、本研究ではこの問題に対してAllan Gibbardの意味論を一般化するという新しいアプローチを試みている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

道徳というものが何か所与のものとして、疑うべからざるものとして受け入れられている現在、その道徳についての錯誤論（これは道徳が体系的に偽であるとする）や懐疑論（これは道徳について我々は何も知りえないとする）という「極端な」学説--むろんここで極端というのは偽であるとか疑わしいことを含意しない--に基づく、道徳の変容の可能性を示唆することは、現在の「モラリスティック」な社会においては、現行の実践について一定の反省的な考察、すなわち、畢竟我々にとって道徳は有益な役割を果たしているのかという問いを促すという点で意義あるものと思われる。

研究成果の概要（英文）：Assuming error theory and/or moral skepticism, we investigate the possibility of morality as a kind of rational fiction. Though revolutionary expressivism, as an answer to the 'now-what' question, is promising in so far as we use it as a basis for such morality, expressivism itself is not theoretically viable unless the Frege=Geach problem can be solved. Our approach to the Frege=Geach problem is to generalize Allan Gibbard's semantics in *Wise Choices, Apt Feelings* (1990), and *Thinking How to Live* (2003). First, while Gibbard essentially relies on the idea of hyperstates, we deem it unsatisfactory because it is psychologically unrealistic. Thus, we use states not necessarily maximal to construct expressivist semantics. Second, this generalization naturally gives rise to a variant of Beth model, which originally Evert Willem Beth proposed as an intuitionistic semantics. Third, based on Ian Rumfitt's falsificationism, we found how to recover classical logic in this semantics.

研究分野：哲学

キーワード：メタ倫理学 表出主義 錯誤論 懐疑論

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1 . 研究開始当初の背景

「善悪とは何か」という問いが、現在に至るまで哲学の最重要の問いの一つであることは言うまでもない。とりわけ、「道徳的判断と、たんなる物の状態についての判断（記述的判断）とは、いかなる仕方で異なるのか」という問いはメタ倫理学研究の指針となりうる。道徳的判断と記述的判断との重要な違いは、道徳的判断の収束不能性にある。記述的判断については、通常、我々のもつ様々な意見はおよそ一つに収束していく傾向にある。しかし、道徳的判断についてはそうでない。哲学的探求をどれだけ続けても、根本的な道徳的対立が解消されないということはしばしば起こるからである。問題は、「この道徳的判断の収束不能性は我々を道徳否定論に導いてしまう」ことである。なぜなら、道徳的判断の収束不能性は、(A)「道徳的命題をどのようにして知ることができるのか」という道徳の認識論 (B)「道徳的命題が真であるとはどういうことか」という道徳の真理論、そして、(C)「道徳的实践は我々にとって合理的か」という道徳の合理性、この3つの問題圏において、道徳に対して否定的な見解を招き寄せるからである。こうして、道徳的判断の収束この三つ組の道徳否定論にどう向き合うか。(A)道徳懐疑論と(B)道徳錯誤論を受け入れた上で、(C)道徳の不合理性テーゼを退け、道徳の合理性を擁護するという解決方策を試みてきた。

2 . 研究の目的

たとえ道徳懐疑論と道徳錯誤論を受け入れたとしても、一定の制約を満たす内容の道徳であれば、我々は合理的なフィクションとして道徳を受け入れられる。だが、そうした制約を満たす道徳が存在することが具体的に示されねば、申請者の企図する道徳の合理性の擁護は画餅にすぎぬ。果たして合理的な道徳が存在するとしたら、どのような内容の道徳か。これに答えることが本研究の目的である。

3 . 研究の方法

本研究課題「合理的なフィクションとしての道徳と道徳的介入の限界」は、「道徳懐疑論を前提としたときに合理的なフィクションとして我々はいかなる内容の道徳を受け入れるべきか」という問いに答えることを目的としているが、このために、研究の前提となる道徳懐疑論、とくに道徳についての認識的懐疑論(epistemological skepticism)についての再検討を行うとともに、実際にフィクションとして道徳を導入する際に、革命的表出主義(revolutionary expressivism)と呼ばれる見解に依拠することの是非について、主に表出主義の基礎的な研究を行うことによって検討した。

4 . 研究成果

2022 年度については以下の通り。本研究課題「合理的なフィクションとしての道徳と道徳的介入の限界」は、「道徳懐疑論を前提としたときに合理的なフィクションとして我々はいかなる内容の道徳を受け入れるべきか」という問いに具体的なかつ詳細な解答を与えることを目的としている。本年度の研究では主に2つのことがなされた。第1に、研究の前提となる道徳懐疑論、とくに道徳についての認識的懐疑論(epistemological skepticism)についての再検討を行った。具体的には、我々の道徳的信念の相互依存性によって、常識道徳(common sense morality)の少なくとも一部に関しては、その信念が正当化されないこと、徳倫理学において提示されている方法論にはそれ特有の問題があることなどを指摘し、道徳認識論の困難について検討した。第2に、本研究課題の最終的な目標は、道徳懐疑論の吟味に耐えうる合理的なフィクションとしての道徳の可能性の検討であるが、これに関しては、フィクションとしての道徳の可能性に反対し、道徳的实践の廃絶を主張する廃絶論(abolitionism)の検討を行った。廃絶論の論拠は主に2つあり、すなわち、虚構主義(fictionalism)の実行可能性と、道徳的实践の有害性ないし道徳的实践の廃絶の有益性である。とりわけ後者については、道徳判断はしばしば我々自身の行為の規制として働くのであるが、これに関しては美的判断や法に関する判断によって代替できるのではないか、という議論を検討した。これらの成果については、主に『道徳的知識への懐疑』において報告されている。

2023 年度については、フィクションとして道徳を導入する際に、革命的表出主義(revolutionary expressivism)と呼ばれる見解に依拠することの是非について検討した。革命的表出主義によれば、我々は道徳語の使用を、メタ倫理的表出主義に沿うかたちで変更することを主張するものである。だが、そもそも革命的表出主義が可能であるには、表出主義が可能でなければならない。表出主義には、道徳的ないし規範的性質への存在論的コミットメントの回避や、動機付け内在主義の説明可能性といった、メタ倫理学説上のさまざまな利点があるとはいえ、

Frege=Geach 問題(Geach (1965))というきわめて深刻な論理的問題が指摘されてきた。この問題は、多くの論者が解決を試みてきたが、未だ成功をみていない。本年度の研究においては、この問題に対して新しいアプローチを試みている。それは Allan Gibbard (1990), (2003)における Gibbard の意味論を一般化するというアプローチである。結果的にそれが、直観主義論理の意味論として当初考案された Beth モデルを転用し、形式化できることを見出した。さらに、Ian Rumfitt (2007)における反証主義のアイデアを組み込むことによって、結果する論理が、直観主義論理ではなく古典論理になる可能性についても探究している。これは基本的には、Glivenko の定理を、Beth モデルの内部で解釈することによって得られる。なお、以上の経過については、日本科学哲学会第 56 回(2023 年度)大会(於・筑波大学)において「B タイプ不整合を用いる表出主義意味論再考」として報告された。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1．発表者名 野上志学
2．発表標題 道徳的信念の相互依存性の孕む認識論的問題
3．学会等名 日本哲学会第81回大会（九州大学）
4．発表年 2022年

1．発表者名 野上志学
2．発表標題 徳倫理学に特有の認識論的問題
3．学会等名 哲学会第61回大会ワークショップ「道徳懐疑論と徳倫理学」
4．発表年 2022年

1．発表者名 野上志学
2．発表標題 多数の証言と「常識」のベイズ認識論
3．学会等名 日本科学哲学会第55回（2022年度）大会 ワークショップ「証言の社会的認識論」（名古屋大学）
4．発表年 2022年

1．発表者名 野上志学
2．発表標題 Bタイプ不整合を用いる表出主義意味論再考
3．学会等名 日本科学哲学会第56回（2023年度）大会 2023年12月3日
4．発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1．著者名 野上 志学	4．発行年 2023年
2．出版社 勁草書房	5．総ページ数 272
3．書名 道徳的知識への懷疑	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------